

輪蔵

観世弥次郎作

ワキ 太宰府の僧

ツレ 火天

シテ 傳大士

地は 京都

季は 雑

「東に残る法の道。く。迷はぬ教へ頼まん。

「是は筑前の宰府に居住の僧にて候。我若年の昔より。仏法修行の志浅からず候へども。いまだ都を見ず候ふ程に。洛陽の寺社に参り。殊には北野の天満天神は。当社御一体の御事なれば。参詣申さんと唯今思ひ立ちて候。

「筑紫舟。法の為めにと思ひ立つ。く。雲路につく天の原。出づる日影の程もなく。難波の浦に着

きしかば。是よりやがて旅衣。日も重なれば程もなく。都に早く着きにけり。く。

「急ぎ候ふ程に。都に着きて候。是より北野に参らばやと思ひ候。

「有難や釈迦一代の蔵経を。大唐よりも渡しつゝ。末世の衆生済度の為めに。輪蔵に納め結縁の。手に触れ縁を結ばせんとの。御神の誓ひぞ有難き。南無や傳大士普建普成。現受無比樂後生清浄土。

火天詞

「なふくあれなる御僧。御身は筑前の宰府より来り給ひて候ふか。」

ワキ詞

「不思議やな都始めて一見の者を。宰府の者とは何とて見知り給ふらん。」

火天

「あら愚かの仰せやな。其方は知ろしめされずとも。我は朝夕白雲の。迷はぬ法の友人なれば。などかは知らで候ふべき。」

ワキ

「是は不思議の御事かな。さてくかやうに承る。」

御身は如何なる人やらん。

火天

「今は何をか包むべき。五千余巻の御経を。昼夜に守護し奉る。十二天の其中に。火天是まで来りたり。」

ワキ

「そも火天とはまのあたり。天部を拝み申す事よと。感涙肝に銘じつゝ。現とも更に弁へず。」

火天

「此方も御身の貴さに。」

ワキ

「随喜渴仰。」

火天 「さまぐに。

地 「説き置きし。御法の花も色々に。く。教へは多
き道ながら。悟りは一つぞ胸の月。曇らじや三界。
唯一心の外ならじ。所は北の宮居。北辰は動かず。
天満つ星のめぐるなる。輪蔵をひらきて。静かに
拝み給へや。

ワキ詞 「あら有難の御事や。五千余巻の御経を。一夜に拝
ませおはしませ。

火天詞 「五千余巻の御経を。一夜に御僧の拝まんとは。お
ふけなき御事なれどもさりながら。御身父母の胎
内を出でしより此方。五戒を乱さず慈悲を起し。
仏道修行し給ふ事。

地 「其功既に年久し。

火天サシ 「然るに此御経に於て。大唐よりも渡されし。

地 「傳大士普建普成とて。其身は俗体なりといへども。
此三人の如何なれば。彼御経に値遇の縁。深き心

の隙もなく。昼夜に経を守護し給ふ。

クセ「其後日本に。渡りし法の舟の内。難波路遥かに漕がれ来し。心筑紫の果よりも。仏法東漸の。都の北の宮寺に。

火天「納め給ひし昔より。

地「今末の世といひながら。類ひ稀なる上人の。結縁の利益仰ぎつゝ。衆生を済渡し給へ。我も姿を改めて。必ずこゝに來りつゝ。行道の利益なさんと。

いふかと見えて失せにけり。く。 (中人)

ワキ「月は隈なき後夜の鐘。声澄み渡る折節に。

地「不思議や異香薫じつゝ。音楽聞え紫雲たなびく絶間より。花降り下るぞあらたなる。いひもあへねば妙経の。く。守護神の御厨子の。扉は忽ち四方へひらけて。傳大士二童子顯はれたり。

シテ「釈迦一代の御法の御箱。

地「釈迦一代の御法の御箱を。彼上人に悉く与へんと。

普建普成の二童子に持たせ。上人の御前にさし置き給へば。

シテ「傳大士座を立つて。

地「傳大士座を立つて。竹杖にすがり。膝をかゝめて上人を礼し。彼御経を読誦し給へば。善哉なれや善哉なれと。夜遊を奏して舞ひ給ふ。

地「いづれも妙なる舞の袖。く。月も照り添ふ雲間より。天部の姿は隠れもなく。天降るこそ有難け

れ。

火天「そもく是は。釈迦一代の蔵経の守護神。十二天の其内に。火天の姿を顕はすなり。

地「火天忽ち天降り。く。程なく目前に顕れ出で、上人に向ひ。即ち結縁の行道の利益。めぐらし給へと。各立ち寄り上人を誘なひ。輪蔵に御手をかけまくも。かたじけなしと互におしめぐり。めぐりめぐるや日月の光り。曇らぬ御法のあらたさよ。

火天「是はこれ妙経の守護神なれば。」

地

「是はこれ妙経の守護神なれば。夜の間に転経の儀式を顕はし。上人悉く披見の其後。各御箱をとりぐに。遥の神前に運び給ふ。傳大士伴なひ神前に積み置き。いよく当社当寺の仏法。繁昌の霊地を崇め給へと。上人に教へ。天部は雲井に上らせ給へば。七宝莊嚴の瑠璃の座の上に。傳大士二人の童子を伴なひ。く。帰り給ふぞ有難き。」